

特別支援教育研究論文集

—令和元年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所

自発的な動きが制限されている重度の障がいがある子どもの
微細な動きを利用した入力装置の工夫
—訪問教育を通じた学習や生活の質を高める活用方法に焦点をあてて—

鳥取県立皆生養護学校

教諭 美船 俊介

令和2年3月

公益財団法人 みずほ教育福祉財団

要旨

著者は、平成8年頃より、研究会などへの参加をきっかけとして支援機器の活用について、その工夫と指導実践に取り組んできた。

今までの取り組みを通して、重度の障がいがある子どもたちに支援機器や自身の動きで操作できる入力スイッチなどを活用することで、活動を広げ、社会参加も可能になると考えている。

卒業していく子どもたちに自分の支援機器や入力スイッチを持たせて社会に送り出すことができれば、卒業後の彼らの生活の質を高めることができる。

また、3年前より訪問学級を担当することになって、より障がい重い子どもたちと学習する機会が増えた。彼らは身体の変形、拘縮などにより、自発的な動きが制限されていることが多く、この子たちの学習や生活の質を高めるためには、子どもの微細な動きを利用した入力装置を工夫することが必要だと考えた。

まず、著者が、これまで文献や先行事例を参考に校内で工夫してきた支援機器などについて振り返りながら、学習や生活の質を高める支援機器の活用方法、子どもの微細な動きを利用した入力装置の工夫について明らかにした。

次に、校内や訪問学級での実践を通して、入力装置を活用した取り組みや生活の質を高める取り組みについて紹介し、入力装置を活用する際に気をつけなければならないこと、生活の質を高める活動を考える際に大切なことについて明らかにした。

続いて、厚生労働省の資料などを基に、入力装置の入手に活用できる制度について調べ、入手方法について明らかにしようと試みた。そして、支援機器を入手するために、教育現場ですべきことについて明らかにした。

次に、今まで述べてきたことを振り返って、重度の障がいがある子どもの学習や生活の質を高めるためのポイントについて提案した。

最後に、まとめとして、研究について振り返り、改めて支援機器や入力装置の有効性について触れ、支援機器や入力装置を安心して使える環境を整えることがインクルーシブな社会を構築するうえで大切なことだという結論に至った。

キーワード：アシスティブ・テクノロジー 支援機器 入力装置 訪問学級 生活の質